

明智光秀と「本能寺の変」

2020.6.27収録
京都市考古資料館 山本 雅和

はじめに

天正10年(1582)6月2日早朝、明智光秀が本能寺に滞在していた織田信長を急襲しました。日本史上最も有名な事件のひとつである「本能寺の変」です。天下統一に向けて邁進していた信長が斃れたことにより、その後の歴史の流れも大きく変わることとなりました。研究者や小説家・信長ファンによる本能寺の変をめぐる論説は数え切れません。

その一方で、遺跡としての本能寺のようすは長らくわかっていませんでした。しかしながら、近年、少しずつではありますが、調査の機会が増えてきています。今回は遺跡の調査成果を中心に明らかとなってきた本能寺と二条御新造の姿を御紹介します。

1. 「本能寺の変」の経過

天正10年(1582)

- 4月21日 織田信長、甲斐より安土城へ凱旋。
- 5月15日 明智光秀、徳川家康の安土城での饗応を命じられる。
- 5月17日 信長、毛利攻めへの出陣を決定。光秀、出陣準備のため坂本城へ戻る。
- 5月26日 光秀、出陣準備のため坂本城から亀山城(現在の亀岡城)へ移動。
- 5月27日 光秀、亀山城から愛宕神社へ参詣。連歌会を開催。
「ときは今あめが下知る五月哉」
- 5月28日 光秀、亀山城へ戻る。
- 5月29日 信長上洛。本能寺に入る。
- 6月1日 信長、本能寺にて茶会。光秀、亀山城より出陣、本能寺へ転進。
- 6月2日 本能寺の変。本能寺にて織田信長、二条御新造にて織田信忠が自刃。
- 6月5日 光秀、安土城に入城。
- 6月9日 光秀上洛。味方の勧誘、軍勢催促。
- 6月13日 山崎の戦い。光秀、敗走中に落命。

2. 本能寺の変遷

応永22年(1415)頃 妙本寺(現在の妙顕寺)の僧侶:日隆が油小路高辻と五条坊門(仏光寺通)との間に建立。当時は本応寺と号する。

この間に「内野(平安宮跡地)」に移転。

永享5年(1433) 「左京四条一坊十五町」:北を六角、東を大宮、南を四条坊門(蛸薬師通)、西を榎筥に囲まれた場所へ移転。本能寺と号する。

天文5年(1536) 天文法華の乱により焼失。堺へ移転。

天文14年(1545)頃 帰洛。「左京四条二坊十五町」:北を六角、東を西洞院、南を四条坊門(蛸薬師通)、西を油小路に囲まれた場所へ移転。

天正10年(1582) 本能寺の変。

天正19年(1591) 豊臣秀吉の政策により、寺町御池(現在の場所)へ移転。

3. 本能寺の発掘調査事例

・本能寺の寺域

一町(約120m)四方

北を六角小路、東を西洞院大路、南を四条坊門小路、西を油小路に囲まれた区画
土倉の沢村より購入する(北東角の一部を除く)

西側(油小路側)から東側(西洞院大路側)へ向けて傾斜する地形

・絵画に見る本能寺

『上杉本洛中洛外図屏風』

「法能寺」の書き込み

中央部北寄りに東西棟の瓦葺建物 2名の僧侶が参拝

東西棟南西側に南北棟の瓦葺建物

西部に東西棟の柿葺建物

南部に東西棟の柿葺建物

内部は屈曲する塀で区画

マツなどの樹木

周囲の堀・築地塀は描写されていない

・調査①

本能寺の東部中央 西洞院大路に面した位置

西洞院川を埋めた整地層(16世紀中葉)

北から西へL字形に折れ曲がる堀(16世紀後葉に埋まる)→内部を区画する堀

南北部分の堀は検出長8m以上・幅4m以上・深さ1m以上 西肩に3段の石垣

南北部分の堀の埋土から輪宝を額に戴いた鬼面や龍を表現した鬼瓦・「能」字の銘の軒丸瓦や赤く変色した瓦が出土(16世紀後葉)

東西部分の堀の埋土から題目や光明真言を記した卒塔婆が出土

・調査②

本能寺の中央部北西寄り

東西方向に並ぶ3基の礎石据え付け穴(16世紀中葉~後葉)→建物跡の一部(北西隅部)

柱間は約2.1m(7尺)

南北方向の溝(16世紀中葉~後葉)→建物西側の雨落溝・排水溝

検出長4m以上・幅約0.5m・深さ約0.2m 軒の張り出しは約2.7m(9尺)

整地層・土取穴(16世紀末頃)→本能寺の変のあとの整地層

「能」字の銘の軒丸瓦や赤く変色した瓦・焼けた壁土・土器が出土(16世紀後葉)

・調査③

本能寺の南東隅部

西洞院川を埋めた整地層(16世紀中葉)

四条坊門小路北側で東西方向の堀(16世紀末頃)→本能寺の南堀

幅2m以上・深さ1m以上

・調査④

本能寺の北東隅部

西洞院川を埋め立てた整地層(16世紀中葉~後葉)

本能寺の変にかかわる顕著な遺構は見つかっていない→中心建物はなかった

4. 本能寺の復元に向けて

発掘調査からわかったことをまとめると次のようになります。

- ① 16 世紀中葉に西洞院川の一部を埋めて、整地が行われました（調査③・④）。
- ② 本能寺の周囲は堀で囲まれていました（調査③）。堀の内側には築地塀があり、東側には門がありました（←『本城惣右衛門覚書』の記述）
- ③ 内部も堀によって区画されており、北東部の堀は石垣を積み上げていました（調査①）。
- ④ 境内の中央部には礎石をそなえた建物がありました（調査②）。
- ⑤ 瓦葺きの建物があり、火災で焼失しました（調査①・②）。
- ⑥ これらの遺構は 16 世紀末には埋められて整地が行われました（調査②・③）。

5. 二条御新造の発掘調査事例

・二条御新造の変遷

元は二条家の邸宅（別称：二条殿御屋敷・二条屋敷・二条新造御所・二条殿御池城など）

天正 4 年（1576） 織田信長が邸宅を二条家より譲り受け、京都での滞在地として整備。

天正 7 年（1579） 信長が皇太子：誠仁親王に進上。

天正 10 年（1582） 本能寺の変。誠仁親王退去ののち織田信忠と馬廻衆が交戦・討死。

天正 15 年（1587） 正親町天皇の命により跡地に大雲院が創建。

天正 18 年（1590） 豊臣秀吉の政策により、大雲院が寺町御池（現在の場所）へ移転。

・二条御所の範囲

一町（約 120 m）四方（ただし、室町小路沿いは町屋が並ぶ）

北を押小路・東を烏丸小路・南を三条坊門小路・西を室町小路に囲まれた区画

・絵画に見る二条御新造

『上杉本洛中洛外図屏風』

「二条殿」の書き込み

檜皮葺建物・柿葺建物が各 1 棟 縁側で貴族たちが庭園を眺める

建物の周りに庭園 池・庭石・マツなどの樹木

周囲の一部に築地塀

・調査①

二条御新造の中央南寄り

大規模な庭園（17 世紀初頭に改変）

陸部に地下式礎石を備えた掘立柱建物

池は西に向けて傾斜

庭石は傾斜面上部に 2 基と下部に 1 基 汀に洲浜

・調査②

二条御新造の南部中央

浴室遺構（蒸し風呂 16 世紀末）

竈 2 基・土間・井戸

・調査③

二条御新造の北東部

押小路南側溝（堀）・烏丸小路西側溝（堀）

屈曲する東西方向の塀と石敷き（16 世紀末頃）

炭と焼土におおわれる

6. 二条御新造の復元に向けて

発掘調査からわかったことをまとめると次のようになります。

- ① 二条家の邸宅であった 16 世紀後半まで庭園の整備が続けられていました（調査①）。
- ② 居住者が織田信長や誠仁親王になっても庭園は維持されました（調査①）。
- ③ 邸宅の南部中央には浴室遺構がありました（調査②）。
- ④ 屈曲する塀と石敷きがあり、火災で焼失しました（調査③）。

まとめ

このように、本能寺や二条御新造について文献や絵画の記載が裏付けられた一方、内部が複雑な構造であり、建物の配置など未解決の問題も多くのかさかれています。「本能寺の変」の検証はまだまだこれからです。

引用・参考文献

- ・『洛中絵図 寛永後万治前』臨川書店 1979 年
- ・『洛中洛外図大観』（上杉家本）小学館 1987 年
- ・高橋康夫『洛中洛外』平凡社 1988 年
- ・『平安京左京三条三坊十町（押小路殿・二条殿）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002- 7（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- ・藤井学『本能寺と信長』思文閣出版 2003 年
- ・山本雅和「京都の戦国時代」『戦国時代の考古学』高志書院 2003 年
- ・『本能寺跡発掘調査報告 平安京左京四条二坊十五町』関西文化財調査会 2008 年
- ・「平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008 年
- ・『平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-11（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008 年
- ・『「本能寺の変」を調査する』『リーフレット京都』No.231（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2008 年
- ・『平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-20（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010 年
- ・『本能寺城跡－平安京左京四条二坊十五町－』古代文化調査会 2012 年
- ・『平安京左京三条三坊十町 二条殿御池城跡』古代文化調査会 2015 年
- ・『平安京左京四条二坊十六町跡・本能寺城跡』国際文化財株式会社 2017 年
- ・河内将芳『宿所の変遷からみる 信長と京都』淡交社 2018